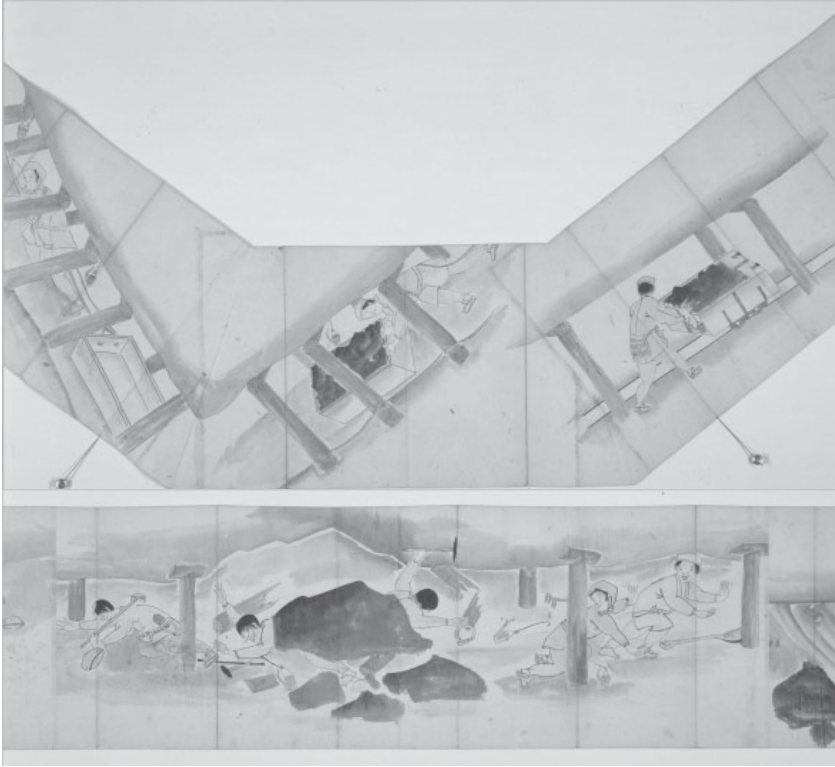


国立歴史民俗博物館の愉悦⑫

囚人労働絵巻

明治10～20年代



囚人労働絵巻は、その名の通り、北海道幌内炭鉱の囚人労働を描いた作品である。現在、総合展示第五展示室（近代）の「産業と開拓」コーナーに実物が展示されているが、展示室で目にすることができるのは、全長約八メートルに及ぶ作品の一部分に限定される（写真とは別部分）。囚人だったとされる作者については判然としないが、官宮幌内炭鉱の払い下げを受けた北海道炭礦鉄道会社で同炭鉱の主任等を務めた人物の家に伝わったものである。近代初期の北海道開発における囚人労働の役割は大きく、一八八一年の樺戸集治監設置以降、各地に集治監や分監が置かれ、囚人は土木・耕耘・採鉱などに従事した。このうち、一八八二年に設置された空知集治監では、囚人の約半数が幌内炭鉱に投入され、

一八九四年の囚人労働廃止まで、同炭鉱の労働力の大半を囚人が占めていた。

さて、この絵巻の形態は蛇腹状の折り本だが、通常、折り本や巻物（卷子）といえば、紙は直線になるように接がれ、まっすぐ、長く広がる姿を想像することが多いだろう。しかし、この絵巻は、全体の中ほどで約四〇度上方に屈曲し、全体を俯瞰すると、「ㄣ」のような形状になっている。また、屈曲した少し先に、さらに一箇所、窪んだように屈曲した部分もある（上段写真の場面）。このような形状が選ばれた理由は、石炭の採掘から鉄道輸送までの過程を描いた絵巻の内容にあるように思われる。

絵巻全体の冒頭（右端）に描かれるのは貨物に石炭を積んだ機関車で、これは、一八八二年、手宮―幌内間に開通した官宮幌内鉄道であろう。次に、鉄道まで、石炭を満載した手押し炭車が運搬される様子が描かれ、場面は炭鉱の坑内に移る。まず、広い場所に集積された石炭が炭車に掬い込まれる場面が描かれ、採炭現場から炭車が入るところまでの区間、坑道を運炭用の函で運搬する場面が続く。絵巻が屈曲しているのは、この運搬の場面であり、絵巻の特殊な形状は、作業に従事する者の険しい表情と相まって、坑内の傾斜の厳しさや労働の過酷さを表現する工夫であったと考えられるのである。

その先に描かれているのは採炭現場の様子で、地圧を制御する木の支柱を準備する者（仕練夫）、背の低い炭層で寝そべて鶴嘴を振るう者（採炭夫）、発破用の穿孔作業に従事する者、それらの作業を監督する人物などの姿がある。そして、絵巻の最後に描かれているのは、落盤によって押しつぶされ、ガス爆発で吹き飛ばされる鉱夫の無残な姿である。

わずか一枚ではあるが、炭鉱における囚人労働の様子を知りうる貴重な絵画資料であり、描かれた人物の服装や用具などから読み取れることも少なくない。とともに、紹介した絵巻の特殊な形状や構成は、囚人とされる作者がこの作品に込めた想いについて、様々に想像をかき立てる。